事例報告①

生徒の主体性を掘り起こす仕掛け作り
～今、輝きの瞬間（とき）～

報告者▸　澤井　洋一（京都府立城南菱創高等学校主幹教諭）

皆さま、こんにちは。城南菱創高校で主幹教諭をしております、澤井と申します。本日は、このような機会をいただきまして、ありがとうございます。30分という時間ですが、少しでもご覧いただいている方々の参考になればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（スライド１）本日、私がお話をさせていただきますのは「生徒の主体性を掘り起こす仕掛け作り～いま、輝きの瞬間（とき）～」ということです。「いま、輝きの瞬間（とき）」と言いますのは、本校開校以来ずっと、学校のキャッチコピーとして掲げている言葉です。今回の私の話の主題となってまいりますので、話の中で具体的に説明をさせていただきます。

（スライド２）本日のメニューです。まず、Introduction として簡単にお話をさせていただきます。続きまして、学校紹介です。京都府の方は城南菱創高校をよくご存じだと思うのですが、今回は全国でご覧になっておられると聞いておりますので、学校の紹介をさせていただきます。そして、いよいよメインですが「主体性を掘り起こす仕掛け その１」といたしまして「こだわり学、ゼミ活動」についてご報告を申し上げます。それから、少し欲張ってしまいまして「その２」といたしまして「カリキュラム選択」です。本日はこの４本立てでいきたいと思っております。

（スライド３）では、まず、Introduction です。「いま、輝きの瞬間（とき）」です。「瞬間」と書いて「とき」と読ませるのですが、皆さん、この言葉を聞かれたときに、学校のどのような場面を思い浮かべますでしょうか。これは体育祭ですが、多分、このような場面を浮かべられる方が多いのではないかと思います。「いま、輝きの瞬間（とき）」です。これは、研修旅行中のバスの中です。みんな、楽しそうですよね。これは、部活ですが、確かに、ここに映っている生徒たちは躍動的ですし、生き生きとしていますし、非常に輝いていると思います。

（スライド４）例えば、このようなシーンです。これは本校の授業風景ですが、静かにしっかりと授業を受けています。これも授業風景です。これは生徒が発表していまして、生徒が真剣に聞いているシーンです。これは本校の渡り廊下です。渡り廊下に自習机がありまして、生徒たちが黙々と自習をしています。「いま、輝きの瞬間（とき）」で、あまりこの光景を浮かべませんよね。では、ここに映っている生徒た

ちは輝いていないのかということです。

（スライド５）学校というところは、常に生徒たちに課題・ミッションを与え続けています。生徒たちがその課題を受け止める姿勢は、大きく２つに分かれます。一つは「受動的」な態度です。もう一つは「主体的」な態度です。受動的にミッション・課題を受け止めた生徒ですと、その課題は「他人事」です。いわゆるやらされ感満載で「先生がやれと言うからやってるねん」というような受け止め方になるかと思います。それに対しまして、その課題を主体的に受け止めてくれていれば、そのミッションは「我が事」となるかと思います。生徒たちが目の前の課題を主体的に受け止めて「我が事」にしたその瞬間にこそ「輝きの瞬間（とき）」が訪れるのではないかと、私は思っております。

先ほど「輝いていますよね」と言って、体育祭の写真や部活の写真を見せましたが、これも受動的に受け止めていて、他人事でしたら、輝いていないと思います。逆に「これは『輝きの瞬間（とき）』ですか」と言いました、授業中の黙々と勉強している風景や自習している風景も自分の学習課題を主体的・我が事に受け止めていたとしたら、見かけはそうではないですが、実は、輝いているのではないかと思っております。

「主体的」という言葉は、非常に難しいことだとつくづく思っています。われわれは気にせずに「主体性を身に付けさせる」と言ってしまうのですが「身に付けさせる」の「させる」が付いた時点で主体的ではないですよね。そこで、私は言葉として「主体性を掘り起こす」と言っています。掘り起こすのはわれわれで、その後は、生徒たちが主体性を身に付けてくれるように頑張ってもらうという流れかと思っております。ただ、主体性を掘り起こすといっても、放っておいても掘り起こさないので、学校において大事になってくるのが「仕掛け」かと思っております。学校の中でさまざまなところに、いろいろな「仕掛け」を仕掛けていきまして、生徒の主体性を掘り起こそうという流れになるかと思っています。もう一つ、この仕掛けに関しても、できるだけ「これは、先生が仕掛けた仕掛けや」と生徒にばれないようにしたいと思っております。さらに言えば、仕掛けた教員すらも仕掛けたことを忘れているくらいまで落とし込めれば正解かと思っております。

（スライド６）では、学校紹介に移ります。本校の沿革です。本校は京都府立城南高校と京都府立西宇治高校の２つが平成 21 年に合併いたしまして、できました。創立 12 年目の、京都府の中でも非常に新しい学校です。前身の城南高校も西宇治高校も非常に伝統のある学校ですので、そのような２校の伝統の上にできあがった学校であるとわれわれは捉えております。

（スライド７）学校概要です。本校は全日制課程の単位制高校となっております。普通科と専門学科の教養科学科がございます。普通科は各学年で４クラス、教養科学科は各学年で２クラスです。教養科学科に関しましては、人文社会科学系統と自然科学系統の２系統からできあがっております。

（スライド８）概要を続けます。男女比ですが、女子 60%、男子 40%という、女子の多い学校です。部活動の加入率に関しましては、93%で、これは京都府の中でも非常に高いと聞いております。女子だけでいきますと、京都府で２番と聞いております。学校全体で部活動が非常に盛んです。四年制大学の進学希望は 95%で、本校に入学してくるほとんどの生徒が、入学時点で、四年制大学の進学を希望しているという状況です。このような言葉があるかどうか分かりませんが「進学型単位制高校」とわれわれは位置付けさせていただいております。

（スライド９）それでは、学校紹介を終わりまして、ここからいよいよ主題の「主体性を掘り起こす仕掛け その１」といたしまして「こ

だわり学、ゼミ活動」について報告をさせていただきます。対象の生徒ですが、教養科学科の１年生と２年生になります。活動の時間ですが、毎週月曜日の７時間目を充てております。年間の回数は約 30 回です。これは２年間のプログラムになっておりますので、年間 30 回、トータルで 60 回のプログラムになってまいります。

（スライド 10）活動の流れですが、まずゴールから説明させていただきます。最終的なゴールは、２年生の各ゼミに分かれての研究活動になります。このゼミについての詳細はこの後にご説明申し上げますが、大学のゼミを思い浮かべていただければよいかと思います。生徒たちが自分の興味関心のあるゼミに分かれて研究活動を行っていくということです。最終的には、ゼミの中で代表を一人決めます。その代表がそのゼミを背負ってゼミ対抗のプレゼン大会に臨みます。大きな会場の大きなスクリーンでプレゼンをするわけです。その中で、最優秀研究賞を決定していくというプログラムとなっております。

このゼミですが、どのようなゼミがあるかといいますと、大きく理系と文系に分かれています。

（スライド 11）２年生の自然科学ゼミで、これが地学ゼミです。それから、生物ゼミ、化学ゼミ、そして物理ゼミ、最後に数学ゼミで、全部で５ゼミございます。

（スライド 12）続きまして、人文社会科学系統のゼミですが、英語ゼミ、国語ゼミ、社会ゼミという３ゼミです。５足す３の全部で８ゼミございます。先ほど、教養科学科は２クラスと言いました。２クラスで 80 人です。80 人が８ゼミに分かれますので、１ゼミ大体 10 人程度です。それに対して、各教科の教員が１名または２名付きます。実は私は国語の教員なのですが、今年はラッキーなことに国語ゼミを持たせていただいております。非常に楽しんでさせていただいております。これが２年生のゼミです。

（スライド 13）この２年生のゼミ活動に向けてあるのが、１年生です。１年生で何をするかといいますと「こだわり学」です。「こだわり学」というのは、耳慣れない言葉ですよね。全国的にも「こだわり学」を行っているところは少ないと思います。具体的には、課題発見、自己探究、プレゼン技術、コミュニケーション力、このような能力を養うのが「こだわり学」の趣旨です。この辺りは、なかなか難しいのですが、ポスターセッションやディベート大会をしながら、このような力を養っていきます。

（スライド 14）全体の流れです。もう、お気付きかもしれませんが、ゼミで一人で研究活動をしていくとき、どのような力が必要なのかを考えたときに、１年生の「こだわり学」で求める力は絶対に必要になってくるのではないかと思っております。そのため、１年生でベースになる力を身に付けさせて、それを使って２年生で主体的に研究活動をしてもらうという仕掛けを仕組んでいるわけです。特に、１年生の「こだわり学」は、なかなか工夫が必要で、こちらから与えることは非常に簡単なのですが、できるだけ自分たちで主体的に行ってほしいので、われわれはこのようなことを大切にしています。それは「面白さ」です。結局、面白ければ、生徒たちはどんどん自分たちでしてくれます。他人事にならずに我が事になります。そのため、面白さを重視しながら１年生のプログラムを組んでいるということです。

（スライド 15）それでは、この「こだわり学」について、流れを少し説明させていただきます。先ほど、２年生のゼミ活動に関しましては、教科に付けると言わせていただきましたが、この「こだわり学」に関しましては、分掌に付けております。担当分掌が学科企画推進部です。そこに担当教諭を２名配置しておりまして、本年の「こだわり学」の教員は、新規採用２年目の英語科の渋谷先生です。もう１名は、新規採用１年目の数学科の山際先生という、２年目と１年目の非常にフレッシュなコンビに「こだわり学」を任せております。

ここからは、具体的に「こだわり学」についてお話をするのですが、私がここで説明するよりも、このフレッシュな二人に出てきていただいて、報告をしていただいたほうがよいかと思っておりますので、二人に登場いただきたいと思います。

（スライド 16）「現在の『こだわり学』の取組について教えてください」

渋谷先生が来ました。「今、１年生は『マイプロジェクト』というものに取り組んでいます」「ほう、それはどのようなプログラムなんでしょうか」

山際先生です。「自分自身が改善したいと考えている社会的事象を１つ探し、それについて調べ、最終的には改善案を提案するといったものです」

（スライド 17）「へー、おもしろい取組ですねえ。生徒たちも喜んでやってるでしょ？」「最初の内はすごく楽しんでやっていたように思うんですが。今はちょっと……」「えっ、今はそれほどノリノリではないってことですか？」「そうですねえ。課題設定の時点でその時のノリで決めちゃっている子は、実際様々に調べていくと、行き詰まるみたいで」

（スライド 18）「その行き詰まる原因って、何なんでしょうね？」「やっぱり最初の課題設定が大きすぎるんじゃないかと思います」「それと、本当に解決したい課題が見つけられないっていうのもあるような気がします」「それって根本的な問題じゃないですか？」

（スライド 19）「課題は設定できても、それがどうも他人事になってる気がしますね」「それに、課題を解決するために誰に何を尋ねればいいのかも分からないみたいです」「そういったことを全部教員が教えてしまうと、意味がなくなりますからね」「そうなんです。ついつい教えてしまいたくなるんですけど、そこは自分で悩んでほしいところなんで」

（スライド 20）「もうそろそろ発表の日が見え出す頃ですよね」「はい。やっと焦り出した感じです。ここへ来て、失敗したくないっていう気持ちが強く出てきました」「我々もなんか失敗させられないという気持ちが強かったかなと思います」「そうそう。１年生での失敗は、必ず２年生のゼミ活動を支えるベースとなると思うんです。だから失敗も経験だって思えばいいのかなって」

（スライド 21）「１年生での成功体験は」「２年生のゼミ活動の大きなモチベーションになりますね」「１年生での失敗体験も」「２年生ではもう失敗したくないというモチベーションになりますね」「いずれにしても１年生のこだわり学が主体的な２年生のゼミ活動につながるということですね」というように、お二人に登場いただきました。私は、この二人の奮闘を前で見ております。本当に苦労して「こだわり学」のプログラムを組んでくれています。もちろん、生徒も「こだわり学」で力を付けていると思いますが、それ以上に、このフレッシュな二人が「こだわり学」でこだわって、力を思い切り付けているのではないかと私は思っています。

ここのスライド（スライド 21）にもあるのですが、結局、１年生でうまく成功した生徒に関しては、当然ながら２年生の研究活動も順調に進んでいきます。ただ、１年生で全く駄目だっ

た、失敗した生徒のほうが、２年生になって、本当に失敗できないということで、主体的に自分の研究活動を進めていってくれるかと思っておりますので、この「こだわり学」は、なかなか良いプログラムではないかとわれわれは思っております。まず、これが１つ目の仕掛けでした。

（スライド 22）続きまして、２つ目の仕掛けです。「カリキュラム選択」について説明をさせていただきます。先ほどの「こだわり学」のゼミ活動は、教養科学科、専門学科のプログラムです。今回のカリキュラム選択に関しましては、普通科４クラス、160 人のプログラムとなっております。これは、普通科の３年間のカリキュラムです。字が細かくて、別に見てもらおうと思って出しているわけではなくて、こんな感じですよということですが、ご注目いただきたいところがございます。それは、ピンクのところです。１年生のピンクのところは、音・美・書です。要するに、ピンクのところが選択科目となっています。１年生は芸術科だけですが、２年生になってまいりますと、見ていただくと３分の２くらいが選択科目です。３年生になると、ほとんどが選択科目です。そのため、生徒は朝、ショートホームルームで「おはよう」と友達にあいさつすると、終わりのショートホームルームで「どうやった？」というまで会わない友達がたくさんいるというのが３年生です。たくさんの選択科目を用意しております。

（スライド 23）少し見にくいので、この黒いところを拡大させていただきました。このような感じです。「英語表現Ⅱ」「英語特講」「実践英語」、英語だけで３つございます。ここから自由に選択します。国語も「国語表現」「古典特講」という形で２つございます。よく見ていくと「特講」というものがあるのですが、この特講科目は、簡単に言うと、入試演習です。つまり、自分の入試科目を取ってもらって、演習をしていくことになります。最初のほうで、本校は「進学型単位制」と言わせていただきましたが、このようなところに特徴を出しています。ここには、全部で 17 の科目がございます。160 人が 17 講座に分かれますので、普通に考えると１講座 10 人いきませんよね。中には 30 人や 20 人の講座が当然できますので、10 人を下回るような講座もできます。入試演習の特講の写真ですが、このような感じです。教室の３分の１くらいで入試演習をいたしますので、非常に実践的な演習ができると生徒たちも喜んでおります。

入試ばかりなのかと言われそうなのですが、そうではありません。よく見ていただきますと「スポーツⅡ」というものがあります。これは、非常に珍しいと思います。「生活と福祉」、これも珍しいですね。福祉系の科目もたくさん置いてあります。これらに関しましては、本当に少ない人数で行っておりまして、外部の地域の方に来ていただいて、講師として授業をしていただいております。少人数で、直接、地域の方から授業を受けることができるという、非常に密度の濃い授業となっております。

他の特徴としましては「実用書道」「音楽総合」「描写」と、芸術科目もあちらこちらに置いております。これらも、本当に少ない人数です。企業の方、外部の講師に来ていただいて、少人数でこのような形で授業を展開することができますので、その科目を身に付けたい生徒にとってみると、本当に実践に近いところで実技を学ぶことができるという特徴がございます。地域の方を講師にしたり、外部講師を呼んできたりすることは、当然、全国的にどこでもされていることだと思います。ただ、年に１回、２回など、トピックになっていることが多いのではないかと思います。本校に関しましては、本当に少人数で展開でき、年間を通しての授業のプログラムに組み込んでおります。そのため、常に誰かが校舎内におられるという状態です。そのようなことができるのが、この講座の良い

ところかと思っております。

また、どうしても気になるのが、右下の「スカラー」です。このスカラーというのは、自習です。「自習って、何やねん？」と言われそうですが、他の生徒たちは先生に付いて勉強していますが、このスカラーを取った生徒は、スカラー教室に行って自分で自習をするというプログラムです。つまり、自分の学習課題が明確になっていないと、自習なんてできません。監督はおりません。これは、週に４時間まで取れます。ただ、受験勉強をしているのかというと、そのような生徒もおりますが、中には、今年でしたら、書道関係の大学に行きたい生徒がおりまして、ちょうどスカラーの時間に書道教室が空いているので、書道教室に行って、ひたすら50 分、一人で字を書いているなど、そのような使い方をしている生徒もおります。生徒にとってみたら、非常に使い勝手の良い選択かと思います。

（スライド 24）１年、２年、３年で、これだけの選択科目があります。これを生徒は科目選択しなければなりません。ここで大事になってまいりますのは「自分の興味関心」です。興味関心が固まっていないと、自分のカリキュラム選択ができません。そして、もう一つは「自分の進路目標」です。これが固まっていないと、これだけの中から時間割をつくることはできません。われわれは「自分だけの時間割を作成する」と呼んでおります。当然、絶対に取らなければならない縛りは若干ありますが、やはり他の学校に比べると本当に自由度が高いです。そのため、われわれはこれを広報に使っております。中学校へ行って、この話をします。「君たち、自分たちで時間割をつくれるんだよ」と中学生に言いますと、中学生はびっくりします。当然ながら、時間割というのは学校が決めていて、学校から与えられるものですよね。受動的に与えられて、それを引き受けて、淡々とこなしていくと中学生は思っているのです。そのため、自分で時間割をこれだけの中から好きなものを選べるというのは非常に魅力みたいでして、本校を狙ってくる生徒たちの一番の動機は、時間割が自分でつくれるからということになってまいります。ただ、お気付きだと思いますが、これをつくるのは大変です。自由度が高いということは、それだけ悩みも多いということになります。

（スライド 25）カリキュラム選択の１年生の時間割作成の流れです。１年生で３年分、取らせ切りますので、１年生は本当に大変です。ゴールは 10 月で、そこで本登録となってまいります。10 月の本登録に向けて、７月に仮登録、三者面談です。仮登録から本登録までは、ほとんど変更はないですので、実質のゴールは７月の仮登録となってまいります。仮登録したものを夏休みの三者面談で、保護者の方、本人、担任の先生で「これでいいですね。これでいきますよ」という確認をします。７月に向けて、４月、５月で、われわれ教員側からの情報提供と指導が入ってまいります。担任による個人面談です。それから、科目選択ガイダンス、進路ガイダンスは、各分掌や各教科で行ってまいります。ここで情報を提供していきます。その提供された情報を基に、生徒たちは時間割を組んでいくわけです。

われわれがこのプログラムを考えたとき、４月、５月の教員側から情報提供をするのは、本当に小まめに丁寧にしていかないと、生徒は時

間割が組めないのではないかという話になりました。そのとおりです。そのため、こちら側もかなり覚悟していたのですが、実際にさせてみて、それは心配なかったと思いました。なぜかと言いますと、４月に生徒が入学してまいります。そうすると、当然、部活に入りますよね。部活に入りますと、そこには２年生の先輩と３年生の先輩がおります。当然、２年生と３年生はもう履修しているわけですから、１年の生徒は、２年生の先輩、３年生の先輩を捕まえて「先輩、あの授業、どうなんですか」「あの授業、面白いですか」「取って大丈夫ですか」と、情報を自ら収集し出します。つまり、われわれが心配している以上に、生徒のほうが主体的に先輩から情報収集に回ります。

それから、これは後ほど保護者の方から聞いたことなのですが「先生、高校に行きだしてから、急に、いろんなことを相談してくれるんです」「どんなことですか」と聞いたら「学校の授業とか、教科のことなんです」。要するに、自分で何を取ってよいか分からないので、保護者の方と相談しているのです。保護者の方は「そんなん、分からへんわ」と言いながらも、すごくうれしかったとおっしゃっています。つまり、自ら保護者の方に声を掛けていって、自分のカリキュラムをつくろうとしています。

また、４月になって、教科の教員がやって来ます。教科の教員は、当然ながら、自分がこれから取ろうとしている教科の教員でもありますので、授業が終わった後に先生を捕まえて「先生、僕がこの授業を取って大丈夫ですか」という話をし出します。われわれはそれを見ていると、生徒自身で積極的に動き出していると感じます。そして、何よりも、クラスの友達です。自分たちが収集してきている情報を持ち寄って、情報交換をします。「私は、こんな情報を持ってる」「私は、こんな情報を持ってる」と交換しながら「じゃあ、この授業を取ろうか」ということが高校１年生の４月、５月で、生徒たちの間にできあがっていきます。これにより、生徒というのは、我が事のこととなると本当に動くのだ、われわれが細やかな情報提供をしなくても大丈夫なのだと思いました。

（スライド 26）これは最初に出したスライドですが、ＭＩＳＳＩＯＮです。今、お話をさせていただきました場合のミッションというのは「自分だけの時間割の作成」です。自分だけの時間割作成というのは、受動的・他人事では絶対にありません。主体的・我が事となってまいります。この作成のプロセスが、主体的・我が事となりますと、このようなことが起こってまいります。授業に対する責任が生まれてまいります。つまり「その授業を取ったのは誰ですか。自分でしょう。悩んで取ったんでしょう、友達と情報交換したんでしょう」ということから、その授業を取ったのは自分なのだという意識が生まれてまいります。そのため、授業に対する責任感が生まれてきます。そして、これが最終的にどこにつながるかといいますと、授業が我が事になってまいります。つまり、授業に対するモチベーションが生まれてくるということです。われわれが何も言わなくても、その授業は自分たちが取った授業なのだと、モチベーション高く授業を受けてくれるという流れの仕掛けになってまいります。これが普通科のプログラムです。以上、２つほどご説明申し上げました。

（スライド 27）まとめさせていただきます。「主体性を掘り起こす様々な仕掛け」ということで、本日、お話をさせていただきましたのは、ほんの一部です。当然ながら、あちらこちらに仕掛けがしてあって、生徒たちは高校３年間、その仕掛けを経て自分たちの主体性を掘り起こしていってくれるのですが、生徒たちは高校３年間が終われば卒業していきます。大学に行ったり、社会に出たりします。社会に出たときに、生徒たちの前には常に課題がございます。これは、別に生徒だけではないと思います。わ

れわれ人間というのは、常に目の前に課題がございます。課題のない人生はないというように思います。その課題を主体的に受け止めて、我が事にする、そのような人こそ、その瞬間に人生において「輝きの瞬間（とき）」を迎えるのではないかと思っております。人生は長いですので、長い人生の中で、この「輝きの瞬間（とき）」をたくさん経験できるような人の人生は、非常に充実しておりますし、豊かなものになるのではないかと思っております。そのような人生のお手伝いとして、われわれは日々の仕掛けを工夫しているということです。

（スライド 28）以上「生徒の主体性を掘り起こす仕掛け作り～今、輝きの瞬間（とき）～」ということでお話をさせていただきました。

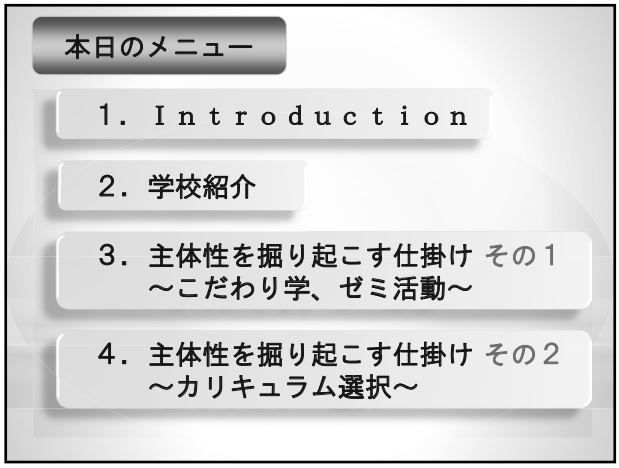
（スライド 29）ご清聴・ご視聴、ありがとうございました。ご意見・ご感想をよろしくお願いいたします。

以上です。ありがとうございました。

澤井　洋一（京都府立城南菱創高等学校主幹教諭）

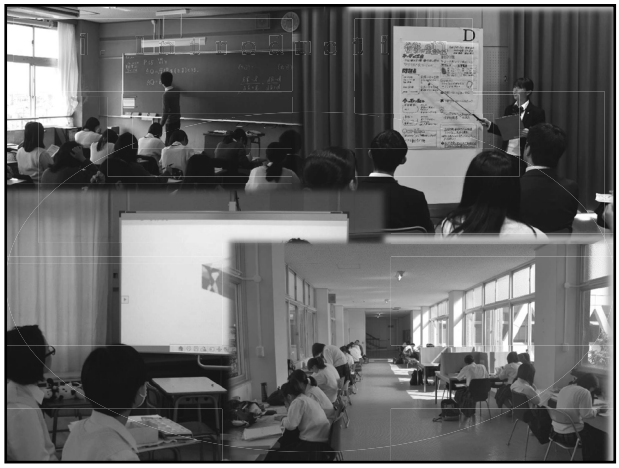
スライド１

スライド２



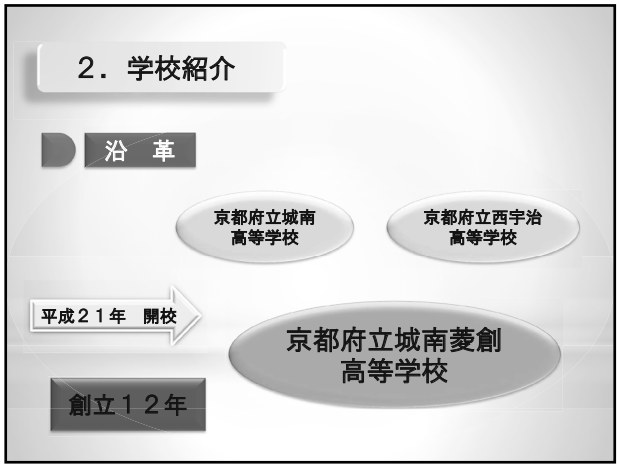
スライド３

スライド４

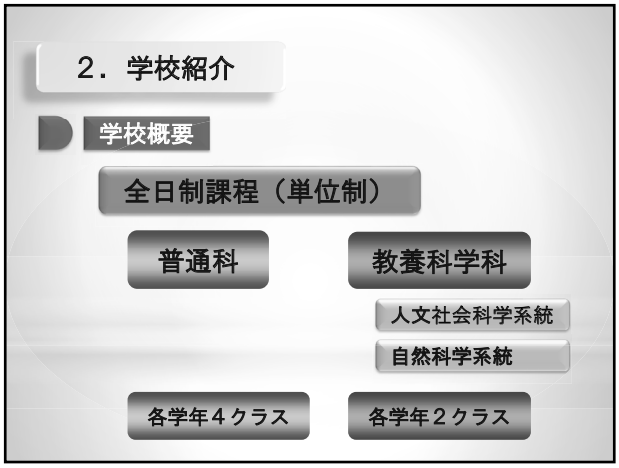


スライド５

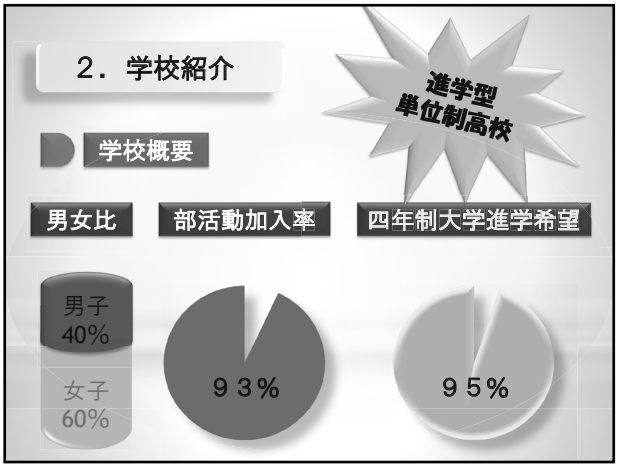
スライド６



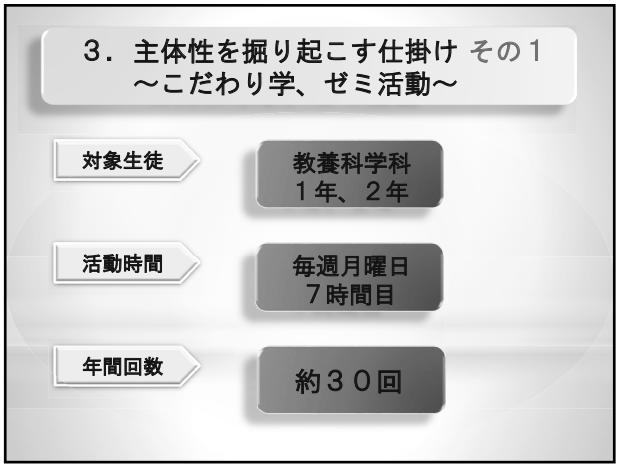
スライド７



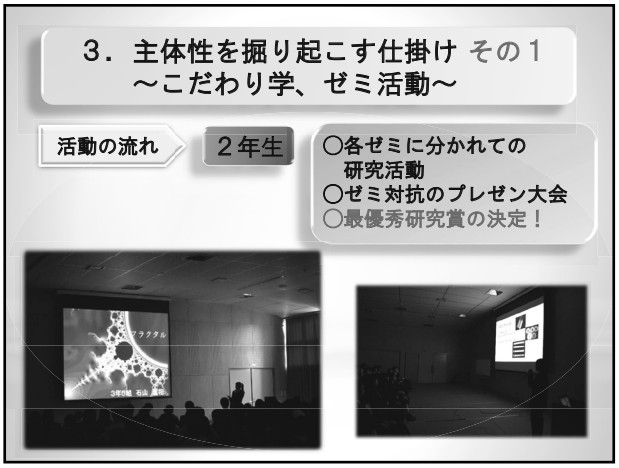
スライド８



スライド９



スライド 10

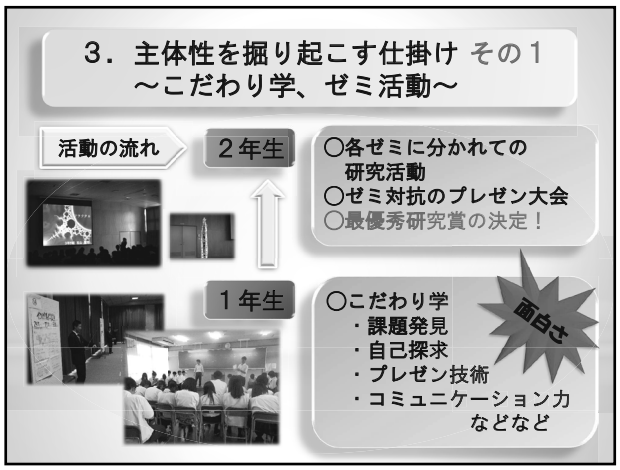


スライド 11

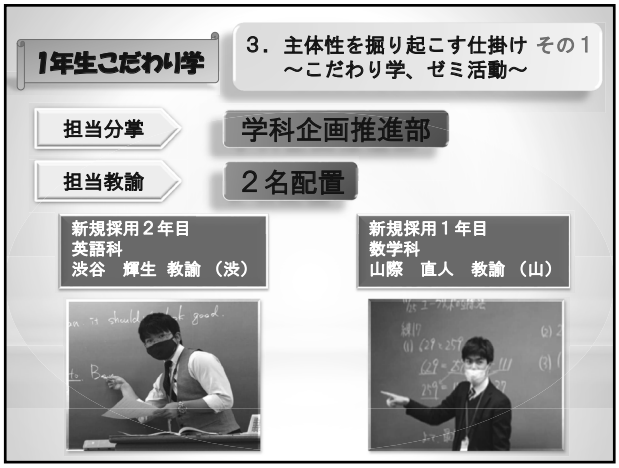
スライド 12

スライド 13

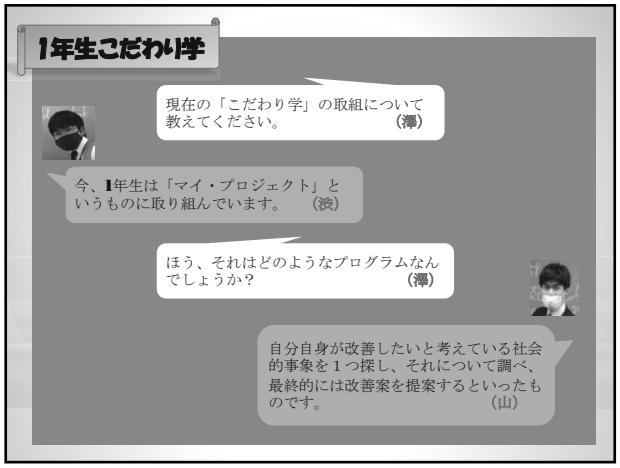
スライド 14



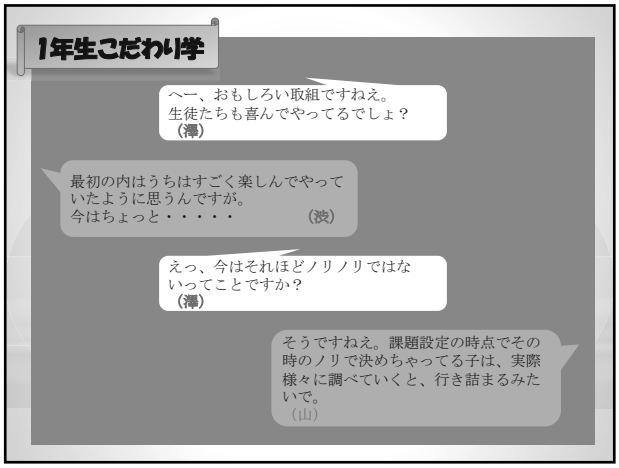
スライド 15



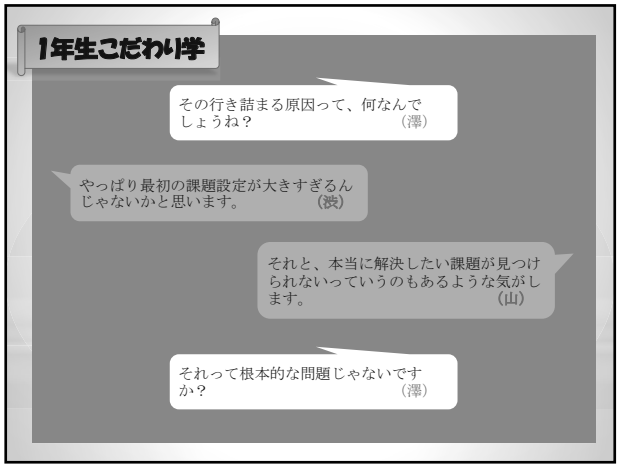
スライド 16



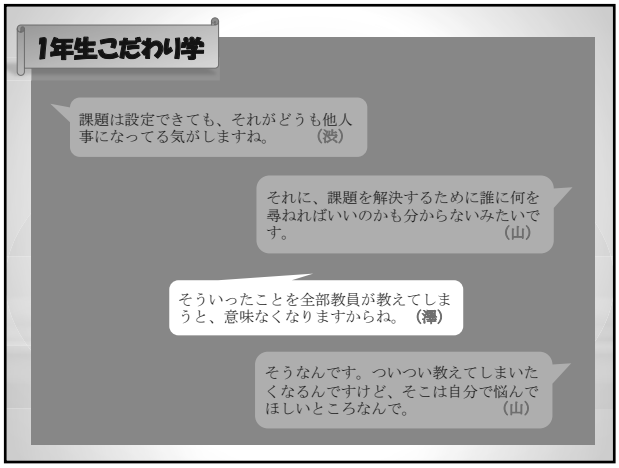
スライド 17



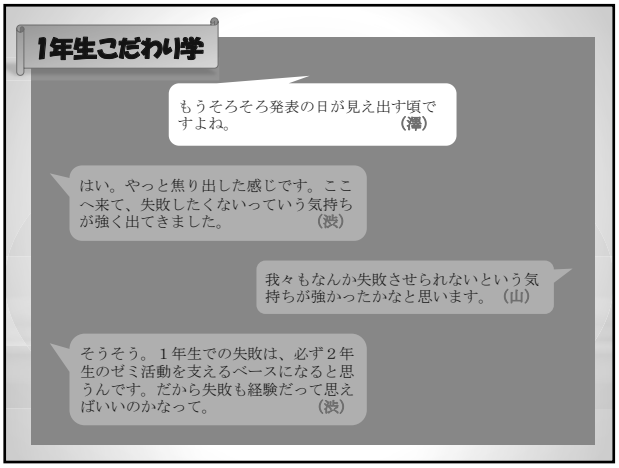
スライド 18



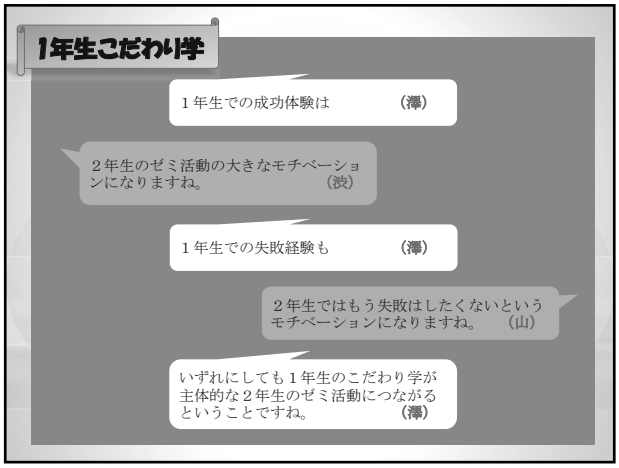
スライド 19



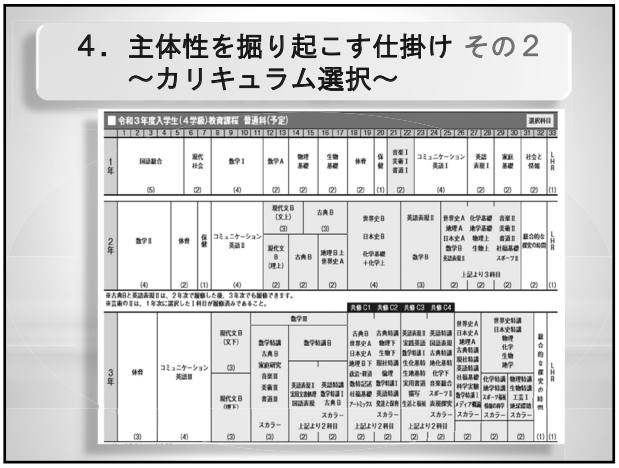
スライド 20



スライド 21

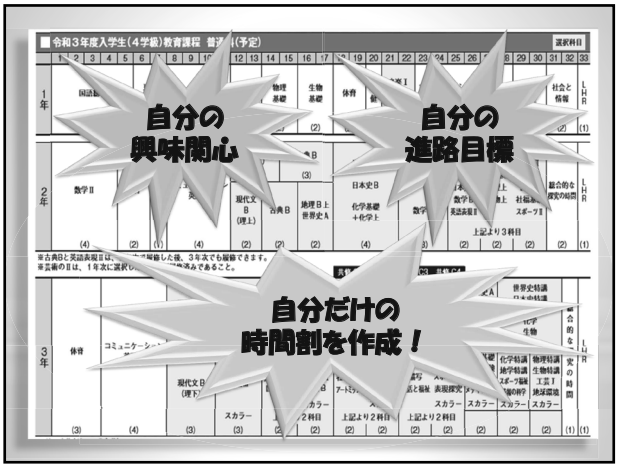


スライド 22

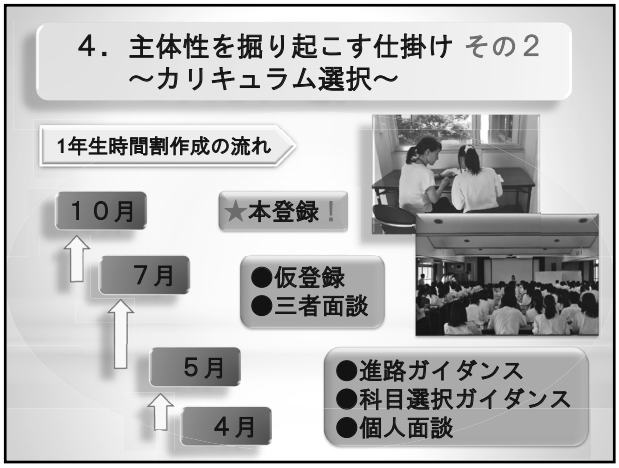


スライド 23

スライド 24

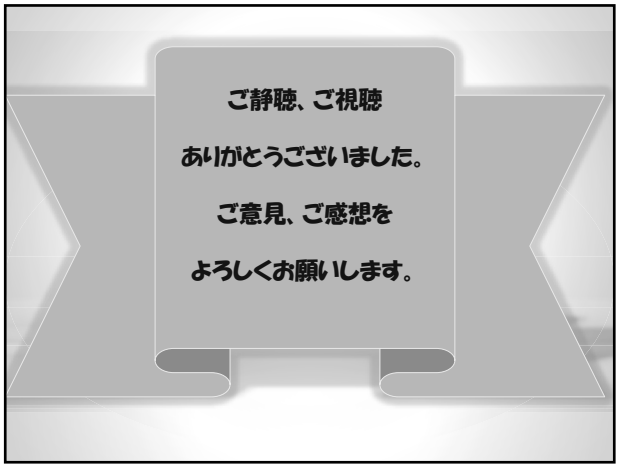


スライド 25



スライド 26

スライド 27

スライド 28

スライド 29